総会特別企画

若者はどこで育つのか

― 東日本大震災ボランティア活動から見えてくるもの ―

★総会後の特別企画では、３人のゲストをお迎えしてお話を聞き、話し合いました★

困っている人を助けるのはあたりまえ

桐生ボランティア協議会会長
宮地由高さんのお話より

桐生で和菓子屋を営む宮地さんのボランティア精神は先祖代々。祖父は関東大震災の時にリヤカーと自転車で炊き出しに行ったという話を物心ついた時から聞かされ､｢困っている人を助けるのはあたりまえ｣という環境の中で、いろんな境遇の人と出会い、お坊ちゃま扱いされずに育ったそうです。宮地さんのお話は、現地の映像も使ってリアルなものでした。

以下、宮地さんのお話から私たちが学ぶことはなにか、いくつかまとめてみます。

（１）すばやい対応･行動･･･なにかあるとすぐに｢行くよ｣と声がかかる

とかく会議や指揮系統が煩雑で時間がかかる行政のお役所仕事とは違います｡｢神戸の震災が起こった時も炊き出しに行くのはあたりまえのことで､『行く人がいたら行こう』と言ったら、たくさんの仲間が集まりました。一過性のことではなくて、仮設住宅が無くなるまでしっかり支援しようと、結局６年間神戸には通い続けました。ロシアの重油タンカー座礁の油とりも、みんなが行きたいというので軽いノリで３回行きました｡宿泊は民宿で、出来る限りドンちゃん騒ぎしてお金を落とすようにと、楽しんできました。その後も、三条の水害や中越地震など、何かあるとすぐ、『行くよ』という話が出てきます。別段難しい話ではありません。かしこまって行くのではなく、ごくあたりまえに｡｣

(左から) 宮地由高さん、近藤敬子さん、小山潤也さん

（２）段取りの良さと仲間づくり

例えば、お得意の炊き出しは次のように。

「炊き出しに行く前に、桐生で炊き出しのセンターを作って、前日にいろんな婦人団体の人が集まってくれて“きざみ”をしてくれます｡『私たちは被災地に行けないけど』と｡我々はそれを持って行けばすぐ煮炊きができて、あっという間に６００食～８００食できるシステムが構築されています。現地に水はありませんからお米も研いでから行きます。南三陸・歌津中学校の避難所はコミュニティが形成されていて、班ができていて当番で規律正しく、我々と一緒になって炊き出しをやってくれました。我々が作る人、向こうがただ食べる人ではなくて、一緒になって交流しながら仲間づくりをする、そんな関係をつくるのが大事だと思っています｡」

（３）地域のネットワークと資金力･･･寄付の文化を作り続けて30年

「私たちはこの３５年間の中で３８０万円の基金を作りました。基金が集まってから行

くのではなく、基金を取り崩してすぐ活動ができるのです。今回の地震では桐生の旅行会社や観光バス会社もキャンセルで困っていたので、基金を使ってボランティアバスツアーを組んで“泥かきツアー”を始めました。(桐生から日帰りで行ける範囲の宮城県岩沼市を中心に、道具も調達して参加費２千円で誰でも行けるように募集し、毎回４０名の参加があった。)岩沼市の病院には毎日高校生が行ってくれて、すごいマンパワーできれいになりました。(後日、再開した病院から感謝状が届いた。)桐生工業高校と樹徳高校は授業を振り替える形で、桐生高校は休みの日に行ってくれました。

桐生に帰って活動報告をすると、また寄付をいただける。この３０年間寄付の文化をと作り続けてきて、つくづくよかったと思っています。また、福島から移り住んでいる方のために、店の倉庫を利用して、市民から寄付された中古の家具や電化製品や食器などを運び入れ、被災者が自分で欲しい物を選んで持って行ってもらい喜ばれています。すると桐生市も我々に『協力する』と運搬用トラックを買ってくれました。」

（４）リーダーを育てる、システム作り

「活動の中で、今２０人ほど素晴らしいリーダーが次々に育っています。私は次に継ぐ世代の人達が参加しやすい環境を作るのが役割だと思っています。組織としては各地区のチームリーダーを中心に、定例会議を持ち、リーダーの報告を聞きながら、すべての事業が順調に進むかどうか、問題点は何か、きちんと動くようなシステム作りをしています。」

（５）助けてくれるのは自衛隊でも行政でもなく、隣組のひとたち

「私の関わっている事業の中で、例えば『地域福祉活動計画』は、地域の中で助け合いを中心とした事業がしっかり動くようにすることで、中でも自主防災組織が特に大事だと思っています。被災地を廻ってわかるのは、大災害が起こった時に助けてくれるのは、自衛隊でもなければ市役所でもない。やっぱり隣組の人たち、コミュニティなんです。例えば、南三陸町吉野川地区の仮設住宅では集会所がない。孤独死をなくすためにお年寄りが昼間居られる場所、子どもたちが学校帰りに居られる場所、自治会の打ち合わせなどができる場所が必要。自治会は大事で、それがしっかりできていないと復興が全然違ってくる。神戸の場合でもそうでした。そこで桐生のロータリークラブに働きかけたら、４５０万円のお金を集めて集会所を作ってくれました。」

まず現地に行って、自分の眼で見てほしい

藤岡災害ボランティアサークル
代表近藤敬子さんのお話より

主婦の立場でボランティアサークルをたちあげた近藤さんは、震災まではボランティアというものを全くやったことがない素人。４月に家族と石巻に行き瓦礫を撤去。その後陸前高田、南相馬に行って、これは長くかかるということを、自分の目で見、体験して感じ、「自分で今やり始めないと死ぬ時後悔するだろうな」と思ったそうです。それほど衝撃だったのです。そこで「沢山の人に現地に行って見てもらいたい。なんとかバスを一台出したい」と活動を始めました。始めた時はお坊さんが資金集めに協力してくれて、今では何回も参加して下さる人の中からリーダーが５名ほど出てきました。

近藤さんは、藤岡中央高校の生徒の感想を紹介しつつ述べました。「高校生は『テレビで見たのとは全然違う。』と本当に素直に感想を言ってくれます。春休みには中学生の孫や小学生の子どもを連れた方も行きました。その時、８歳のお子さんが『僕は幸せだなあと思った。(荒浜の海岸で海の水を触って)冷たかったろうな。こんな冷たい中で流された人たちはかわいそうだったろうな』と言いました

が、そういう発想は、大人たちは持てないだろうと思います。まずはまっさらな状態で自分の目で見、感じていただきたい。そしてそれを周りの方に生の声で語っていただくことが大切だと思います。」

「主婦だからこそ、自由な時間を有効に使って」という近藤さんのスタイルに教えられます。

中学・高校生・若者が、ボランティアについて語り学びあう場づくりを

高校生・小山潤也さんのお話より

小山さんは、震災後１ヶ月ほどたって、じっとしていられず一人で現地に行きました。（「育ちと学び」No.12「若者のひろば」には、若者らしい感性で、体験談が綴られています。）小さい頃からキャンプに参加していたので、「困った時は助け合う。震災ボランティアをやるのはあたりまえ」という思いですぐ活動を始めたのです。彼は今、早くも風化が始まっていることを感じ、中学・高校生や若者を集めて、ボランティアについて語り合う場、学びあう場を設けるような団体を作りました。「まだ高校生なので、親から『自分のこともちゃんとできていないのに…』と言われたりしますが、マズローという心理学者の“欲求の５段層”（一番下に生理的欲求～最後に自己実現の欲求）の上に、最近、“第６の欲求”、自分自身が所属するコミュニティ（地域・団体・組織）が発展して欲しいという欲求があるのではないかと言われています。今私たちがやっているのは、このコミュニティ、つまり日本が発展して欲しい、復興して欲しいという欲求から、ボランティアが活発に動いているのかな」と言います。

「これからも、ボランティアのことはずっと考え、伝えていきたい。伝える活動の中で、安全管理も徹底していかなくてはと野外応急救護のライセンスをとりました。しょっちゅう被災地に行けるわけでもないので、これから群馬県でできることを考えています。」

＜質疑、意見交換から＞

◆ **ボランティア活動で子どもたちを教育できるか？**

（宮地さん）「難しい問題。変なカリキュラムを組まれると、ボランティアが嫌いになってしまう人が増えちゃう。そのへんはよくご理解いただきたい。私自身は楽しくやっていますから、それを見て「私も行きたい」という人が増えている。基本的には、毎日の日常の中で、目の前で困っている人がいたらちょっと手助けできるような心の温かさをきちんと持ち続けること。無理やり刷り込むことがほんとの教育になるのかどうか。」

◆ **場を与えられれば、高校生は自分たちで考える**

（高橋さん＝桐生ボランティアセンターのリーダー）「春休み中は高校生の参加が多かった。特に高校生だからと意識した事はない。南三陸町で養殖の復興に使うサンドバッグ作りをやったが、高校生はこっちが驚くくらい、こっちが引っ張られるような形で作業してくれた。場を与えられれば自分たちでやることを見つける。現地に入れば「ちょっとこれは普通じゃない」という雰囲気になるので、一人ひとりが、自分たちにできるのは何か、自分たちで考えるようだ。一日だけの活動じゃ自分たちでやれることは少ないけれど、何度も何度も続けることで力になるのではないか。きのう、震災後初の（養殖の）出荷にこぎつけることができて、やってきたことが実を結んだ。」

★宮地さんも近藤さんもボランティアを「楽しんで」いる。支援先での人々との交流、行動を共にするボランティア仲間（年代も職業も違う普通では出会えない人たち）との交流…そういう「楽しさ」である。それがボランティアの魅力だし長続きの秘訣なのだろう。

《文責：瀧口典子／写真：長谷川陽子》